

平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「自己肯定感、達成感にあふれ、他者とつながり自信を持って生き、社会に貢献できる生徒の育成を図る」

上記「めざす学校像」を実現し、社会貢献できる生徒を育成するために、以下の項目を中心に学校目標を定め、取り組みを継続実施。

- 1 勉強がわかる喜びと自信を育み、前向きに生きる人間を育成
- 2 地域や他者から認められる喜びと他者を認める豊かな心を育み、強くて優しい人間を育成
- 3 学校生活の充実と規律ある高校生活を実現し、社会に役立つ人間を育成
- 4 生徒の健全な高校生活を保障するための教職員の意識向上とサービスの徹底

2 中期的目標

1 勉強がわかる喜びと自信を育み、前向きに生きる人間を育成→基礎学力の向上とわかる授業の創造

(1) 基礎学力の向上と定着をめざし、勉強がわかることを自信につなげるため、授業力の向上をはかる

ア 「学校は勉強するところ」という意識を植え付け、基礎学力の定着と勉強することの大切さや面白さをわからせ自信を育む。

※学校教育自己診断において、3年後には「学校が楽しい」と答える生徒を90%以上とする。

イ 「授業は教師のショータイム」、「『観せる授業』『魅せる授業』の創造」をスローガンに、生徒による授業アンケートの活用や、教員相互の授業見学、校内研修、他校との授業交流等を日常的に行い、教職員の授業力を高め生徒にわかる授業を展開する。

※学校教育自己診断において、3年後には「授業満足度」を70%以上とする。

ウ 留年の防止と中途退学者数の減少をはかり、学業で躓き学校生活に魅力を感じることでできない生徒に、放課後補習や進路用の講習を実施し、勉強することの大切さを教える。

※学業成績による留年生を減少させ、3年後には各学年10名以下とする。

※3年後には、中途退学生を3%以下に減らすとともに、学んでよかったと実感できる学校にする。

(2) キャリア教育の推進

ア 自信をもって前向きに生きる生徒を育成するため、生徒指導、進路指導、学習指導を統合したキャリア教育を学校教育の柱とし、入学後の早い時期から「生き方としての進路」を考えさせ、個々の生徒に最も合った進路指導を行い、生徒の進路を保障する。

※現在約85%の進路決定率を可能な限り100%に近づける。また4年制大学への進学者を40名以上とする。

2 地域や他者から認められる喜びと他者を認める豊かな心を育み、強くて優しい人間を育成

(1) ビオトープを活用して地域の人たちと交流し、コミュニケーション能力や認められる喜びを育てる

ア 地域とともに生徒を育てるという観点に立ち、環境コースや人間専門コースの授業、総合的な学習の時間を活用し、地域の人たちを校内に招き交流することにより、コミュニケーション能力や他者と認め合う心を育成する。

イ 様々な障がいがある生徒が多数在籍する中、SCや特別支援教育コーディネーターや学校生活支援カードを適切に活用し、個々の生徒支援に努めるとともに違いを認め合うことをテーマに人権教育を推進する。

ウ 生徒会活動を活性化し地域清掃や挨拶運動を行うことにより地域から認められ、自らが大切な存在であることを生徒に理解させ、生徒の自信の醸成を図る。
※近隣住民に学校情報を回覧板等で提供、小中学校との交流等により、地域から信頼され、かわいがってもらえる平高生を育成。

(2) 韓国大成一高校との交流に加え、様々な国や地域の人たちとの交流を行うことにより、生徒が違いを認め合い他者理解ができるようにする。

※韓国大成一高校との「スタディツアー」を更に発展させ、何を学ばせたいのか、旅行行程、交流の在り方も含め本校独自のプログラムを策定、実施することにより、生徒の他者を認める力を育成する。

3 学校生活の充実と規律ある高校生活の実現し、社会に役立つ人間を育成

(1) 部活動の活性化

ア 部活動への入部率を上げ、放課後に生徒の声がかき渡る学校にする。

※3年後には、部活動の入部率を現在の25%から50%に引き上げる。

(2) 文化祭・体育大会の充実と生徒の自主活動の啓蒙

ア 地域への公開と生徒一人ひとりが主人公になることができる場面を多く設け、「学校が楽しい」と実感し、がんばることができるように行事を設定。

(3) 規律ある高校生活の実現

ア 生徒理解に努め、暖かく寄り添うとともに厳しく鍛える生徒指導を推進し、「なぜいけないのか」「どうすればよいのか」を納得させ規律を整える。

※3年後には、懲戒件数を20件以下に、遅刻件数を3000件以下にする。

4 生徒の健全な高校生活を保障するための教職員の意識向上とサービスの徹底

(1) 教員に自分の学校という意識を持たせ、自ら考え自ら動く「戦う教師集団」を創造

ア 生徒指導、教育相談等様々なテーマでの校内研修とOJTを実施し、教員の意識向上を図る。

イ 府民からの期待を裏切ることのないよう、今以上に服務規律の徹底を図る。

以上の中期的目標をベースに、生徒に自信や自己肯定感、達成感を植え付け、生徒の生きる力を育み進学してよかったといえる学校を創り上げたい。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔平成26年11月実施分〕	学校協議会からの意見
<p>保護者の回収率は昨年度よりやや上回り40%強となり、肯定的な回答が増えつつある。本校の取組みに信頼を寄せる保護者が増えつつあるようだ。ただ、生徒の意識は、全体的にやや低下気味で、その理由は各校で示すが、特に生徒指導の厳しさ、授業についての肯定感が低い。</p> <p>1. 学校生活全般について</p> <ul style="list-style-type: none"> 65%の生徒が、「学校生活が充実している」と考えているが、2年生での低下がみられる(58%)。昨年度も同様の結果であったが、やや中だるみの傾向がみられるのかもしれない。 保護者の75%が「子どもは喜んで学校に通っている」と回答している。保護者の肯定感は年々増加しており、「生徒と先生の信頼関係」「子どもへの理解」「人権尊重」「保護者の願いに応えている」「情報の提供」等でも、約80%の保護者が肯定的に回答している。保護者への適切で丁寧な説明や連絡が功を奏しつつあるようだ。 <p>2. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> 授業改善の指標である「授業はわかりやすく楽しい」は昨年度より低下している(48%→43%)。その一方で50%の生徒が「授業に集中できる」、57%が「教え方にさまざまな工夫をしている先生が多い」と回答している。また、「成績はテストの得点だけでなく、生徒の努力や授業に取り組む姿勢などを含めて評価されている」「補習・講習を放課後や夏休みに行うなど、学力向上のケアが行われている」等の間について70%以上の生徒が肯定的な回答をしている。 一方で自由記述欄には、「とにかく授業に集中したい」「授業の中での復習が多い、家でさせればよい」「コース選択時にもっとはっきりと教えてほしい」等、勉学への意欲が感じられる回答もあった。 これらの回答から現状を分析すると、単に面白く楽しいだけの授業や勉強を受け身に捉え、楽しくないという層がまだ存在する一方、「授業がわかるようになりたい」「より高度なことを教えてほしい」という前向きな姿勢を持つ生徒も多くなりつつある。 これらのことから、単に楽しく面白いだけではない授業改善の取組みや、成績不振者のための指名補習、進学講習がますます必要であることが分かる。本校の今後の方向性を示す結果であった。 <p>3. 生徒指導について</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒指導の方針に共感できる」「生命を大切にす心や社会ルールを守る態度を育てようとしている」という質問に対し、75以上の保護者が肯定的に捉えているのに対し、生徒は「遅刻指導」「授業態度」「身だしなみ」「頭髪指導」に対する否定的な回答が増加している。 規則に対し、生徒は自分を縛る窮屈なものとして捉えているが、規則を守らせることが目的ではなく、自分に自信を持ち前向きに生きていくための「決まり事」としての規則であることを丁寧に教えていく必要がある。学校であるから厳しさは必要、しかし生徒のちょっとした変化も見逃さず声を掛けることのできる暖かい視点を教師・保護者が共有し、協力して指導できるようにする必要がある。 学年間による指導の差異は、ほぼ解消することができた。 <p>4. 先生に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> 先生は「秘密を守ってくれる」「生徒の意見をよく聞いてくれる」「悩みや相談に…応じてくれる」「いろいろな問題を見逃さず対応してくれる」等の質問に対し、否定的な回答が増加している。 学校は数年前と比べると随分落ち着き、問題行動の減少だけでなく、生徒の勉学に向かう姿勢や学校生活における積極性もよくなった。このような生徒の急激な変化に、教員の意識が追い付いていないところがある。「ここまで落ち着いたのだからもう十分」ではなく、「生徒をどう育てるのか」という視点を教員全体が共有し、伸ばすためにより生徒に深く接し関わる姿勢が必要である。 <p>5. 学校行事について</p> <ul style="list-style-type: none"> 「学校行事に積極的に取り組むことができる」には、生徒(60%)・保護者(83%)共に肯定的な回答が多いが、教員は約半数が否定的。教師がせっかちに成果を求めるのではなく、全て生徒に任せる勇気も必要か。 <p>6. 人権尊重の態度</p> <ul style="list-style-type: none"> 「人権尊重」に対する保護者の信頼は高く(約80%)、一定の信頼を得ていると考えられる。また教員も「人権を尊重する意識を育てようとしている」に対し90%以上が肯定的に答えている。これに対し、生徒は「人権教育の機会が多い」に対し40%しか肯定的な回答がない。このギャップは教員には気づきにくいところで、見過ごしやすい部分でもある。注意しなければならない点である。 <p>7. 今後の平野高校に対して</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者が本校の取組みに対し、最も共感できるのは「学校生活の充実」であり、以下「生徒支援のための教員の意識」「認められる喜びと他者を認める心の育成」「勉強が分かる喜び」の順であった。また本校の魅力は、「コース制」が一番で、以下「学習指導」「進路指導」「選択科目」であった。 今後の平野高校に最も重要なものは、「学習指導(進学・基礎学力定着)」「進路指導」「生活指導」の順であった。これは本校が目標としてきたところだが、これらの実現に向け更なる努力が必要である。 <p>8. 教員の頑張りについて</p> <ul style="list-style-type: none"> 「先生は学校がよくなるように努力している」に対し、60%の生徒が肯定的に答えている。この声を生徒からの我々教員に対する励ましと捉え、更なる努力をしていきたい。 	<p>【第1回(平成26年6月30日実施)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 昨年度も同じことを言わせていただいたが、全学年ともとても静かに授業を受けている。 校舎内にピオトープでの交流で来校した小学生のお礼の手紙が掲示されており、交流の様子がよくわかりとてもありがたかった。 教員、生徒、保護者が一丸となって学校を運営しているように思う。何が生徒のためになるかを常に発想して取り組む姿勢が見える。若い先生が中心になって奮闘していることが印象的だ。 安心な居場所を提供することで生徒が落ち着いていられるのではないかと。居場所づくりは信頼関係づくりと同義。これが平野高校ではできていると感じた。 頑張れない生徒のほとんどは、頑張りたいと思っている。生徒が頑張り方を知らないことを先生達は理解して応援している。その共通認識の下、先生たちがまとまって頑張っていることが生徒に伝わっているのが分かった。学校がきれいに保たれているのもその賜物だと思う。 このような平野高校の取組みや協議会の内容をPTAにもっと伝えていきたい。 やんちゃな生徒を追い回すことに終始していた学校が、やる気のある生徒に目を向けることができるようになった。この雰囲気大切にしながら、更なる発展をめざして頑張してほしい。 <p>【第2回(平成26年12月8日実施)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校教育自己診断の結果で、保護者理解の向上と学年間の指導の差異がなくなったことで、学校の現状が伺える。 PTA活動でこの協議会の内容を伝えたいがうまくいかない。どうすれば学校の活動に保護者が関心を持てるかを探るために、アンケートを実施した。結果は今分析中。 PTAがアンケートを実施することは素晴らしい。小中学校では防災訓練を保護者と一緒に実施しているが、このあたりがPTA活動活性化の参考となるだろう。 自己診断の丁寧なまとめ方が素晴らしい。部活動の加入率はいかほどか。ボランティア活動はどうか。学校からのインプット内容だけでなくアウトプットも知りたい。一部活動加入率は約30%。ボランティアは生徒会を中心に地域清掃、東日本大震災復興支援のための「ひまわりプロジェクト」、ペットボトルの分別回収等を地道に行っている。また幼・小・福祉施設とのピオトープを活用した交流を行っている。 書道部による東日本大震災被災地激励活動も聞き及んでいる。 自己診断で先生への信頼の度合いが低下しているのが気になるが。→数字上は低下しているが、実際に校内を見渡すと、授業での落ち着き、挨拶のできる生徒の数等全てにおいて向上している。評価停滞の理由は、生徒のレベルが上がり学校への期待が高まったから。生徒層が変化しているのに指導方針が対応できていないので、低下しているのではないと思われる。旧態依然とした指導を変えていく時期に来ている。 生徒のニーズが変われば教員の指導方針も変わらなければならない。生徒の変化に気付くアセスメント、状況を把握する力が必要とされている。 学校教育自己診断には、学校の進むべき道が示されている。診断結果を各学年に投げかけて考えさせ、3学期につなげていきたい。 <p>【第3回(平成27年3月26日実施)】</p> <ul style="list-style-type: none"> 保護者にホームページ作成を手伝ってもらってはどうか。 大学でもSNSの取り扱いについて注意喚起している。 遅刻指導を逃れるために、遅刻しそうになると欠席する生徒がいると聞くが。→圧倒的多数の生徒は遅刻をしない。一部の生徒に遅刻が多い。欠席しないようにするためには保護者の協力が不可欠であると考えている。 遅刻数の学年経年変化をみると、上級生になるにつれて減少している。このことから指導の方向性が正しいと判断できる。 校外での問題行動防止に方策はあるか。→毎朝校門付近で迎え入れ指導と、交通指導を行っており一定の成果をあげている。また、未然防止の指導を徹底したい。 保護者への電話について：電話するときは悪い話ばかりでは保護者の態度も硬化する。良いことを伝える電話が大切。 数校で定員割れの高校もあるようだが、新入生の人数など、状況はどうか。→近隣の中学校から、本校を志願する生徒は高校生活に意欲的であると聞いている。近隣数校で定員割れがあったが、本校は前後期とも定員を超える志願者があった。合格者には入試を突破したという誇りが芽生えると思う。 中退者が減少していることから、他人の思いを受け取ることのできる生徒を育ててくれている。 卒業式の様子から教員と生徒の距離が近いと感じられる。裏切られることもあるかもしれないが、信じ続けることで信頼関係を築いていってほしい。 この5年間、教員の良い変化が生徒の良い変化として現れたと思う。 2年間PTA活動に携わり自分自身も充実した。教員の熱い指導にも触れ、いい学校だと実感した。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 前向きに生きる喜びと自信を育み、 勉強がわかる人間を育成	(1) 基礎学力の向上と定着をめざし、勉強がわかることを自信につなげるため、授業力の向上をはかる ア・基礎学力の定着と、勉強することの大切さ、面白さをわからせ、自信を育む イ・授業力の向上と改善のための努力 ウ・留年の防止と中退者の減少 (2) キャリア教育の推進 ア・自分に最も適した進路の選択	(1) ア・「英語Ⅰ」「数学Ⅰ」の習熟度別少人数展開授業、モジュール学習を継続実施し、基礎学力の定着をはかるとともに、授業規律を整え、落ち着いた雰囲気の中で授業を受ける姿勢、勉強を大切に思う心を育む。 イ・『観せる授業』『魅せる授業』の創造をめざし教員相互の授業見学、相互批評、授業改善の討論を趣旨とした校内研修を複数回実施。 ・他の高校や地元小中学校との授業交流の実施。 ・ICTを積極的に活用し、考えさせる授業を展開。 ウ・各学年において2学期から低学力層の生徒に対し補習授業を実施し、留年生を減らす。またこれらの実践を通じて、中途退学者数を減らす。 (2) ア・大阪府中小企業家同友会との連携を更に強化するとともに、活躍する卒業生や大人へのインタビューを企画・実施し、1年次から進路情報を提供し、自らの適性、働くことの意義、どんな職業があるのかなどを考えさせ、進路意識の向上を図るとともに、併せて教員の意識の向上をめざす。 ・キャリア教育を柱とし、学習指導、生徒指導、進路指導を盛り込んだ3年間のトータルな「総合的な学習」を実施し、生徒に様々な題材を提供、自ら考え行動させることにより、生徒の進路意識、積極性、自立心を育む。また、この企画を本校の教育活動の柱とし、生徒を指導する。 ・インターンシップの実施、応募前職場見学の回数を増やすことで、生徒の意識の向上をはかる。 ・進学希望者に対する定期的な進学講習の実施。	(1) ア・学校教育自己診断において「学校が楽しい」と答える生徒を80%以上に ・習熟度別授業で受講者の半数以上の生徒の学力を向上させる イ・学校自己診断において「授業満足度」を60%に ウ・中退率を4%以下に、また学力による各学年の留年生徒数を20名以下にする (2) ア・進路決定率を90%以上に、特に学校幹旋による就職率を90%以上にする ・現在20数名の4年制大学への進学者を30名以上に増やす	(1) ア・イ・学校教育自己診断で「学校が楽しい」と答えた生徒は昨年度同様70%弱、「授業満足度」も50%弱である。わからない生徒が存在する一方、もっと勉強したいと願う生徒が増えてきたことが理由と考えられる。授業中の姿勢、集中力は高くなり、前向きに学習に取り組む生徒は増えている。(○) ・習熟度別少人数授業は、生徒にも好評で、特に数学の遅進クラス、英語の上級クラスで生徒の学力の伸びが著しい。次年度は2年次「数学Ⅱ」においても実施。授業開始時のモジュール学習も定着し、勉強に向かう姿勢と基礎学力の向上が見られる。また成績不振者の指名補習もシステムとして実施し、学力による留年者数は各学年とも3名以下となり全体でも10名以下。進学講習も少人数ながらも継続しており約20名。(○) ・教員の授業力は高まっており、「授業アンケート」「校長の授業観察」でも、一定のレベルをクリアできつつある。ICTを活用した授業も増えつつあるが、未だ十分には活用しきれていない。授業改善の校内研修では、教員が教員に対し授業を行い、それを批評し合った後、「より良い授業とは」をテーマにした討論を行い、成功裏に終わった。(○) (2) ア。「総合的な学習の時間」を活用したキャリア教育は順調に進んでおり、同友会との連携やインターンシップ等もスムーズに運んでいる。学校幹旋の一次合格者が75%を越えた(41/54名)のはこの成果と考えるが、一方で経済状況の悪化に伴い、進学から就職へと進路変更する者が多数出て、6名が就職に回った。一方上記理由から4年制大学進学者は18名となった。また進路希望未定者の数が減らず、最終的に進路決定率は83%となり、7%のアップ。(△)
2 豊かな心を育み、強く優れる喜びと他者を認める人間を育成	(1) ビオトープを活用した地域との交流 ア・地域とともに生徒を育てる イ・生徒相談と人権教育の充実 ウ・生徒会活動のさらなる活性化 (2) 国際交流の拡大	(1) ア・ビオトープで収穫した作物を食材としての地域福祉施設との交流に留まらず、ビオトープ見学会や虫取り大会、理科実験教室等を実施し、近隣小中学校との交流を深め、繋がる力を育成する。 イ・相談委員会や支援教育コーディネーターを中心に様々な課題を抱える生徒のケース会議を行い、その情報を校内で共有し、学校全体で支援する体制を整える。その際支援学校や自立支援推進校、外部機関との連携を強化、協力を得て支援を行う。 ウ・清掃活動、挨拶運動、地域施設等への福祉実習、地元中学校のフェスタ(地域交流会)に参加、地域小中学校との生徒間の交流を図る。 (2)・「スタディツアー」も含め大成一高校との交流は継続して実施する。25年度以上に交流を拡大し、違いを認め合うことができる心情を育成する。 ・海外からの修学旅行等を受け入れも検討する。	(1) ア・参加生徒、地域住民、小中学生の80%以上の人たちから賛同の意見をもらう イ・課題を抱える生徒が中途退学せずに卒業できるようにする ウ・地域住民、小中学校、施設等の80%以上の人たちから賛同の意見をもらう (2) 交流に参加した生徒による報告会を全校集会等を利用して行う	(1) ア・ウ・地域幼稚園、小中学校、施設との交流は例年通り実施。交流した生徒たちのマナーや態度の非常によく、お褒めの言葉を頂いており、それが生徒の更なる励みとなっている。地域からの苦情も激減し、地域清掃や挨拶運動等ではむしろ褒めていただけることも多くなった。次年度はもっと幅広い年齢層の人たちも巻き込んだ地域交流を考えてみたい。(○) イ・支援教育コーディネーターやSC、学習支援員等の尽力、「高校生活支援カード」を用いた校内研修により、課題を持つ生徒が次第に浮き彫りにされ情報の共有、意識の統一ができた。しかし教員には、日常の多忙さにかまけてコーディネーターや支援員に支援を丸投げする傾向が出つつある。戒めなければならないことである。(△) (2) 本校での交流に参加する生徒は30名以上に増えた。しかしそれを企画・準備をする教員の意識が高くなっていないところが問題である。(△)
3 学校生活の充実と規律ある高校生活を 実現し、社会に役立つ人間を育成	(1) 部活動の活性化 ア・入部率の上昇 (2) 文化祭・体育大会の充実と生徒の自主活動の啓蒙 ア・地域への公開 (3) 規律ある高校生活の実現 ア・暖かく寄り添うとともに厳しく鍛える生徒指導を行う	(1) ア・新入生部活動紹介、文化部発表会等部活動紹介の機会を増やす一方、部活動で頑張る生徒や成果を式や集会の中で大々的に紹介し、充実した高校生活に部活動が必要であることを、全教員が一致して指導することで、部活動の加入率を上げる。 (2) ア・学校行事には400名を超す保護者、地域の方々から来校され、生徒の頑張りを称賛していただいている。地域への広報を更に強化し、見る人に喜んでもらえる企画を考え創造できる生徒育成のため、生徒会係を中心に集会等を通じ生徒への意識づけをはかる。 (3) ア・生徒理解に努め、家庭連絡や生徒への声かけを心がけるとともに、厳しく鍛えることで、自ら規律を守ることでできる生徒指導を展開。	(1) ア・部活動入部率を40%に (2) ア・来校した地域の方々から直接意見を聞き、80%以上の人たちからよかったという意見をもらう (3) ア・全教職員が同一姿勢で指導し学年間の指導の差をなくす ・懲戒件数を30件以下に、遅刻件数を4000件以下に	(1) 年度当初は多数の新入生が部活動に加入したにも拘らず途中で退部した生徒が多く、現在30.5%しか入部していない。継続させる難しさを痛感している。(△) (2) 体育大会には400名、文化祭には500名を超す保護者を含む外部の方々から来校され、生徒の頑張りを見てくださった。特に今年度は生徒自身が企画し運営した部分も多く、生徒・教員にとって楽しく有意義な学校行事であった。本校生を元気にし、自信を持たせる一つのヒントになったように思う。(◎) (3)・保護者からの要望でこれまで最も多かった「学年間での指導の差異をなくしてほしい」という要望が、今年度全くなかった。ようやく全教職員の指導のラインを一致させることができた。(○) ・その一方で遅刻は4250件で、3000件台には程遠い。懲戒人数も昨年度より微増して36件52名。(△)
4 生徒の健全な高校生活を保障するための 教職員の意識向上とサービスの徹底	(1) 教員に自分の学校という意識を持たせ、自ら考え自ら動く教師集団を創造 ア・校内研修とOJTの充実 イ・服務規律の徹底	(1) ア・生徒・保護者対応、生徒理解をテーマとした校内研修を実施する一方、教員に責任を持たせて校務を行わせるOJTを推進する。その際教員の主体性を高め、生徒をどのように成長させたいのかを考えさせるため、「平野高校をどんな学校にしたいのか」「そのために自分に何ができるか、何をしなければならないか」「自分が学ばなければならない点」等を常に意識させるようにする。 イ・体罰やセクシュアルハラスメント、個人情報漏えい、成績処理の過ち、不正な金銭の支出等が発生しないよう、校内のチェック体制を確立し、服務規律の徹底のため日常的に注意を繰り返す。	(1) ア・日常的な職務遂行の中で意識づけを行い生徒対応では生徒とのトラブルによる懲戒件数を年間5件以下とする イ・学校教育自己診断において、教員自らの振り返りの項目を設定しその到達度を80%以上とする ・学校教育自己診断の教員向けの項目に、教員のやる気の度合いを測る項目を加え、その達成度を70%に持っていく	(1)・教員の生徒に対する接し方や指導の仕方は、厳しい中にも寄り添う姿勢が感じられるようになったが、まだ十分とは言えない。生徒とのトラブルも1年生を中心に9件発生している。(△) ・学校教育自己診断では、生徒自身は本校で頑張っているという意識を半数の生徒が持っている。これに対し教員は頑張っているという意識は強いが、残念ながら望む効果が十分に出ない。(△) ・教員自身が「どのように生徒を育てたいか」、「そのために個々の教員がどのように生徒に接していけばいいのか」という意識付けが今以上に必要と痛感する。また、このための校内研修を強化する必要がある。(△)